

第5章 学生生活と課外活動

第1節 学生生活

1) 本学教育課程の特色

本学は、開学時より教養課程と専門課程の区分を設けずに4年あるいは6年一貫教育を実施してきた。平成3年、大学設置基準が大綱化され、各学部学科はそれぞれの教育理念と教育目標に基づいて自由に特色ある一貫教育カリキュラムを編成できるようになったので、教養教育と専門教育の連繫をこれまで以上に緊密なものにした一貫教育カリキュラムを編成中である。

本学は、医学及び薬学を総合した特色ある教育及び研究の機関として、高度の知識を授けるとともに、時代の要請と地域社会の要望に応えうる有為の人材を育成し、併せて、医学、薬学の進展と社会の福祉に貢献することを目的としている。医学部医学科は、医師として、①豊かで温かな人間性、広い視野と社会的使命感を培い、②医学の基本的知識、技術、態度を体得し、③医学に対する全人格の関心と生涯にわたって学習を継続していく習慣を養うことを教育理念としている。医学部看護学科は幅広い教養と知識を身につけた資質の高い看護専門職の養成、さらに国際社会において十分に活躍する高度の専門的知識を身につけた人材の育成を教育目標としている。薬学部薬科学科の教育課程の特色は、教養教育と専門教育を有機的に結ぶ4年間の一貫教育を実施していることにある。また、薬学部と医学部及び和漢薬研究所からなる特色ある国立大学として、医薬共通の科目を設けることにより、病態と疾患及び和漢薬に対する知識を授けるとともに、医薬品の開発への志向意欲を伸ばすことを目指している。さらに、教育効果を重視した授業管理の一環として少人数教育の充実を図っている。

このような教育理念及び教育目標に基づいて、リベラル・アーツとしての教養教育の重要性を認識しつつ、教養教育と専門教育の連繫をより緊密なものにしたカリキュラムの編成を目指している。一方、科学技術の進展に対応でき

る専門性と総合性を育成するための教養教育を目指している。

1. 教養教育

教養教育科目を医学部医学科と看護学科においては、教養基礎科目と教養基礎専門科目に分け、薬学部薬科学科においては教養・基礎科目としている。

1) 教養基礎科目は基盤的教育科目で、①専門教育に役立つものというだけでなく、成熟段階に到達していない学生に、限られた時間内で学問の本質的部分を伝達すること、②幅広く深い教養、総合的な判断力、豊かな人間性及び国際社会に対応できる能力を有する人材を育成することを目的としている。したがって、個別的授業科目の枠にとらわれることなく、学際的な視野や相互関連的知識を与え、現代社会が直面する基本的な課題群に総合的に対処しうる能力を涵養することを目指している。従来の人文科学系科目、社会科学系科目、外国語科目及び保健体育科目がこれに当たる。教養基礎専門科目は、専門教育の質的向上を図るために、専門教育の基礎あるいは専門関連領域を修得することを目的としている。従来の自然科学系科目と基礎教育科目がこれに当たる。

人文科学科目と社会科学科目については、これらを統合した主題別科目を導入し、また、自然科学科目及び専門教育科目をも一部取り入れる形で、総合科目を導入している。さらに、少人数教育として基礎セミナーを導入している。

主題別科目では、従来の個別授業科目の羅列を排することにより、各教員の授業が、それぞれの専攻分野の殻に閉じこもりがちになる欠点を克服でき、同時に、各学科の教育目標を反映させることができる。また、設定された現代的な主題に基づいて、その理解や探究に有効な方法論を習得させるとともに、人類の文化に対する理解と広い視野を持てるようにしている。三つの基本主題、歴史と文化、人間と社会、心と行動を設けている。また、周辺領域の授業科目

も設定している。

総合科目では、社会的及び学問的に重要な主題について、複数の部局に属するさまざまな専門分野の教員がそれぞれの専門的立場に基づいて協力し、学際的な講義を行うことにより、多面的な理解と総合的な洞察力を高めることができる。各教員が責任主体となり、順番で総合科目を用意しており、学際系列の総合科目、人間と環境からスタートしている。

基礎セミナーは、教養教育担当教員全員が一つは必ず開講するもので、学生が積極的に参加し、表現し、行動することを通して学ぶ科目で、最大20名をめどとする少人数の演習型科目である。教員が自由に設定したテーマに基づき、外国語の文献講読、資料読解、討論などを通して学問研究の基本的態度の修得と発表能力の開発を目指している。テーマは、キルケゴールを読む、トポロジー入門、論文の書き方などである。

2) 教養基礎専門科目においては、①基礎情報処理学と基礎統計学を必修とし、情報処理教育の充実を図っている。基礎情報処理学は、コンピュータを文具あるいは考察を整理するための道具として利用できるようになることを目的としている。基礎統計学では、統計の理論的基礎と基本的な検定方法を解説している。②基礎補充科目(基礎数学、基礎物理学、基礎化学)を開設し、高校でこれら科目を履修していない学生に対応している。③授業科目名を「数学I」などの漠然としたものでなく、より内容に即したものに変更してある。例えば、解析学、線型代数学、力学、電磁気学である。

2. 専門教育

1) 概要

医学科及び薬科学科においては、医薬の総合教育という立場から、医薬共通の授業科目を設けるとともに、医学科においては、特に病態論に基づく治療法の医学的・社会的問題点をより重点的に思考させ、さらに和漢薬に関する科学的知識を教授する。看護学科においては、あらゆる健康レベルにある人々への全人的、科学的アプローチを基礎にした看護学の知識を教授す

る。薬科学科においては、従来おろそかにされていた病態と疾患に対する知識を与えるとともに、医薬品の開発への指向意欲を伸ばすことを目指している。

2) 授業内容の精選

医学部医学科

①早期体験実習

医学部医学科に入学したことの意義と学習の目標を、体験を通して認識することを目的に実施するものである。1年次5月の連休明けに設定する。1学年を3グループに分け、基礎医学系講座、臨床医学系講座、6年次生の臨床実習に配属し、各1日のローテーションを行う。

この他に、夏季休暇直前に保健医療施設ないし福祉施設において3泊4日の体験実習も設定している。ここでは、高齢者福祉医療と身障者の介護の実際を体験する。

②基礎医学体験学習

基礎研究の実際を体験し、研究推進の論理、研究の実際、得られた成績の解釈の手法を学ぶ。

3年次後学期末の4週間をこれに当て、基礎医学系の各講座を主体に小グループで配属し実施する。

③統合講義

4年次・5年次に開講する臨床各科系統別講義を一部削減し、統合講義を新たに設定する。

統合講義は特定の臓器器官を取り上げ、解剖・生理・病理・薬理・疫学・診断・治療などを統合的に取り扱う講義形態である。この他に精選された主題を設定して幅広く統合を計る講義形態も採用する。学生参画型を目指している。

④臨床実習と晩期体験実習

臨床実習を5年次の9月から約1年間(県立中央病院での約4週間の臨床実習を含む)実施する。実習終末の2週間を晩期体験実習期間とし、県内外の医療施設に出向してプライマリケアを含めた医療現場を体験する。

薬学部薬科学科

①専門教育科目の年次進行

専門教育における授業科目は1年次から開講し、可能な限り、物理化学系、有機化学系、生

物系、そして医薬品系の順に各系の教科目が年次進行して開講されるように配慮している。さらに、各系のバランスに配慮しながら、必修講義科目（コア・カリキュラム）の卒業要件単位をできるだけ少なくし、かつ、必修講義の多くが2年次の前学期までに終了し、2年次の後学期からは選択科目が主体になるように配慮している。学生が選択科目を選択するに際して、極端に片寄った履修をしないように、選択科目をA系列（指定選択科目）とB系列（自由選択科目）に分類し、必修講義科目の不足を指定選択科目を履修することによって補うよう配慮している。

②薬学英语の開設

薬学英语を新設し、専門教育担当教員による専門科目の英語に関する少人数教育を行い、学生とのコミュニケーションおよび薬学英语の充実を図っている。

③医療薬学教育の充実

薬剤師国家試験の内容の変更を考慮し、医療薬学に関する教育の充実を図っている。未だ不十分であるが、現在、医療薬学に関連した講義科目として、医療生化学、病院薬学、疾病学、臨床医学概論Ⅰ（内科系）、臨床医学概論Ⅱ（外科系）などを開講している。

2) 経済援助

イ. 奨学生

表1 日本育英会

区分	学生数 7年2月 現在	奨学金の種類		合計	
		第1種	第2種		
学部	医学部医学科	599	99	33	132(22.0)
	医学部看護学科	119	27	8	35(29.4)
	薬学部薬科学科	449	103	22	125(27.8)
	計	1167	229	63	292(25.0)
大学院	医学研究科	58	24		24(41.4)
	薬学研究科	64	23	2	25(39.1)
	計	122	47	2	49(40.2)
合計	1289	276	65	341(26.5)	

(外国人留学生除く)

日本育英会は、日本育英会法に基づいて設立され、国の育英奨学事業を行っている機関で、優れた学生及び生徒で経済的理由により修学に困難があるものに対し、学資の貸与等を行っている。

本学におけるこの奨学生の推薦の選考は、学部学生は学生委員会、大学院医学研究科生は医学研究科教務委員会、大学院薬学研究科生は薬学研究科委員会と、それぞれの審議機関において推薦基準に基づき行っている。

本学学生の平成7年2月現在の採用状況は、表1のとおりであり、学生数に対する貸与者の比率は、学部学生で25%、大学院生は40%となっている。

貸与月額は、学部学生については昭和60年度入学生が自宅生で22,000円、自宅外生で28,000円であったが、平成7年度入学生では自宅生で38,000円、自宅外生で44,000円となっている。大学院生も修士課程が65,000円⇒81,000円、博士課程が75,000円⇒112,000円となっており、学部学生及び大学院生ともに授業料の値上げにほぼ比例して順次増額されてきている。

また、日本育英会以外の育英奨学団体の採用者も数多く、昭和60年度から現在までに本学が取り扱った育英団体と採用者は、49団体、102名となっており、その内訳は、表2のとおりである。

ロ. 授業料免除

本学に第1期生が入学した昭和51年度当時の授業料は年額96,000円であったが、その後隔年ごとに改訂され昭和60年度においては252,000円、昭和62年度は300,000円、平成元年度は339,600円、平成3年度は375,600円、平成5年度は411,600円、平成7年度の入学生については、年額447,600円となっている。

国立学校では学生の奨学援護の一環として、授業料免除制度がとられているが、本学においても、この制度の適切な活用を図るため、学内規程を整備し、学生委員会において慎重に選考の上決定している。

表2

育英奨学金の種類	医	看	薬	計
富山県奨学金	2	2		4
富山県母子福祉修学資金			1	1
富山市奨学金			1	1
入善町奨学金	1			1
立山町奨学金			1	1
吉田育英会奨学金	9		4	13
富山第一銀行奨学金	1			1
石川県奨学金	3		4	7
志賀町奨学金	1			1
穴水町奨学金			1	1
水原町奨学金			1	1
安田町奨学金	1			1
黒川村奨学金			1	1
十勝勤労者医療生協奨学金			1	1
稲垣村奨学金			1	1
平田町育英資金			1	1
足利市奨学金			1	1
宇都宮市奨学金			1	1
太田市奨学金	1			1
東京都公衆衛生修学資金	1			1
岐阜県選奨生奨学金	3		1	4
岐阜県看護修学資金		2		2
浜松市奨学金	2			2
紀伊長島町奨学金	1			1
大阪府育英会奨学金	8		3	11
和気町奨学金			2	2
広島県看護修学資金		1		1
島根県奨学金	1			1
山口県奨学金			1	1
松山市奨学金			1	1
佐賀県奨学金			1	1
宮崎県育英資金	1			1
都城育英資金			1	1
矢部町奨学金			1	1
富江町奨学金			1	1
鹿児島県育英財団奨学金	1			1
加治木町奨学金			1	1
森下仁丹奨学金			9	9
中村積善会	1		1	2
電通奨学金	1			1
住友生命福祉事業団	4			4
あしなが育英会奨学金			2	2
日本ココロラボトラーズ育英会奨学金	1		2	3

安田記念奨学金	1	1		2
小林育英会奨学金			1	1
川村育英会奨学金			1	1
真宗大谷育英会奨学金			1	1
パリ12大学奨学金	1			1
朝鮮奨学会奨学金	1			1
計	47	6	49	102

昭和60年度からの免除者数は、表3、4のとおりである。

ハ. 学生生活実態調査

学生生活の実態調査は、本学学生の経済面と健康等の実態を把握し、学生生活の充実向上を図る基礎資料を得ることを目的として、現在までに5回実施されている。最初は、まだ学年進行途上の昭和55年に実施、2回目は、学年進行がほぼ完成した昭和58年に実施された。3回目は、大学院医学研究科の完成した翌年の昭和61年に、平成元年には4回目を実施した。5回目からは学生全員を対象として平成4年に実施した。今後も引き続き調査を実施する予定であるが、回収率アップの課題を残した。回収率は、表5に示す結果となっている。

調査の内容は、①住居・通学、②経済・生活、③福利厚生施設、④健康、⑤学生生活および悩みと大きく5項目に区分して行われている。

過去の調査結果を比較してみると、全般的に顕著な変動は認められないが、生活環境が向上している反面、経費が増加していることが示されている。

調査結果の概要は、次のとおりである。住居面では、自室に風呂、台所、便所付きのいわゆる学生マンション形式の室に住む者が6割近くに増えてきており、通学方法も自動車通学が大幅に増え、現在では8割以上に達している。

これを反映してか経済面では、月平均支出額が自宅生では7万円、自宅外生では12万円余りとなっている。

福利厚生施設関係では、食堂、売店、理容室の利用状況、施設に対する要望等については、特に変化はみられなかった。

表3 学部生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免 除 者						
	医	薬	計	前期	医 学 部		薬 学 部		合 計	
				後期	全額 (%)	半額 (%)	全額 (%)	半額 (%)	全額 (%)	半額 (%)
昭和 60	630	429	1,059	前期	34 (5.4)	1 (0.2)	22 (5.1)	0 (0.0)	56 (5.3)	1 (0.1)
後期				36 (5.7)	2 (0.3)	27 (6.3)	0 (0.0)	63 (5.9)	2 (0.2)	
61	630	429	1,059	前期	27 (4.3)	2 (0.5)	21 (4.9)	0 (0.0)	48 (4.5)	2 (0.2)
				後期	26 (4.1)	1 (0.2)	17 (4.0)	0 (0.0)	43 (4.1)	1 (0.1)
62	636	429	1,065	前期	28 (4.4)	11 (1.7)	24 (5.6)	4 (0.9)	52 (4.9)	15 (1.4)
				後期	32 (5.0)	11 (1.7)	22 (5.1)	2 (0.5)	54 (5.1)	13 (1.2)
63	659	435	1,094	前期	33 (5.0)	10 (1.5)	24 (5.5)	3 (0.7)	57 (5.2)	13 (1.2)
				後期	29 (4.4)	14 (2.1)	20 (4.6)	4 (0.9)	49 (4.5)	18 (1.6)
平成 元	643	447	1,090	前期	24 (3.7)	10 (1.6)	16 (3.6)	3 (0.7)	40 (3.7)	13 (1.1)
				後期	22 (3.4)	8 (1.2)	21 (4.7)	2 (0.4)	43 (3.9)	10 (0.9)
2	637	439	1,076	前期	18 (2.8)	5 (0.8)	14 (2.2)	8 (1.8)	32 (3.0)	13 (1.2)
				後期	20 (3.1)	4 (0.6)	15 (3.4)	2 (0.5)	35 (3.3)	6 (0.6)
3	630	450	1,080	前期	13 (2.1)	3 (0.5)	22 (4.9)	3 (0.7)	35 (3.2)	6 (0.6)
				後期	16 (2.5)	5 (0.8)	22 (4.9)	1 (0.2)	38 (3.5)	6 (0.6)
4	636	455	1,091	前期	18 (2.8)	7 (1.1)	17 (3.7)	7 (1.5)	35 (3.2)	14 (1.3)
				後期	22 (3.5)	4 (0.6)	19 (4.2)	7 (1.5)	41 (3.8)	11 (1.0)
5	678	450	1,128	前期	27 (4.0)	5 (0.7)	19 (4.2)	6 (1.3)	46 (4.1)	11 (1.0)
				後期	28 (4.1)	8 (1.2)	17 (3.8)	8 (1.8)	45 (4.0)	16 (1.4)
6	721	452	1,173	前期	37 (5.1)	3 (0.4)	21 (4.6)	3 (0.7)	58 (4.9)	6 (0.5)
				後期	35 (4.9)	8 (1.1)	21 (4.6)	3 (0.7)	56 (4.8)	11 (0.9)

() 内は、学生数に対する免除者の割合を示す。

健康面では、1年間に病気やけがをした者が約4割で、その治療費も1万円以上支払った者も増えている。

学生生活と悩みについては、将来の進路について悩んでいる者が最も多く、次いで試験、進級、経済問題の順で、その対処方法については、大部分が、友人先輩に相談、自分で対処する、なりゆきにまかせるとしており、保健管理センターの利用も傷病治療・健康相談・悩み事相談と利用者の増加傾向がみうけられた。

3) 保険制度 (学生教育研究災害障害保険)

この保険は、文部省が、大学に学ぶ学生の被

る種々の教育研究活動中の災害に対する被害救済の措置として検討してきた災害補償制度であり、財団法人内外学生センターが保険契約者となり、東京海上火災保険㈱を幹事会社とする国内の損害保険会社20社との間に一括契約するもので、各大学は内外学生センターの賛助会員として、被保険者となる学生の本保険加入とりまとめの事務を行っている。

任意加入であるが、本学では、この保険制度の趣旨から全員加入を呼びかけており、新入生については100%が加入している。

補償の対象は、「被保険者が被保険者の在籍

表4 大学院生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免 除 者						
	医	薬	計	前期	医学研究科		薬学研究科		合 計	
				後期	全額 (%)	半額 (%)	全額 (%)	半額 (%)	全額 (%)	半額 (%)
昭和60	70	92	162	前期	0 (0.0)	1 (1.4)	8 (8.7)	0 (0.0)	8 (4.9)	1 (0.6)
後期				0 (0.0)	0 (0.0)	8 (8.7)	0 (0.0)	8 (4.9)	0 (0.0)	
61	71	98	169	前期	1 (1.4)	0 (0.0)	9 (9.2)	1 (1.0)	10 (5.9)	1 (5.9)
				後期	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (8.2)	1 (1.0)	8 (4.7)	1 (5.9)
62	69	103	172	前期	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (9.7)	3 (2.9)	10 (5.8)	3 (1.7)
				後期	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (9.7)	2 (1.9)	10 (5.8)	2 (1.1)
63	69	99	168	前期	1 (1.4)	0 (0.0)	5 (5.1)	3 (3.0)	6 (3.6)	3 (1.8)
				後期	0 (0.0)	1 (1.4)	7 (7.1)	1 (1.0)	7 (4.2)	2 (1.2)
平成元	66	94	160	前期	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (7.4)	5 (5.3)	7 (4.4)	5 (3.1)
				後期	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (8.5)	2 (2.1)	8 (5.0)	2 (1.3)
2	72	90	162	前期	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (7.8)	3 (3.3)	7 (4.3)	3 (1.9)
				後期	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (5.6)	4 (4.4)	5 (3.1)	4 (2.5)
3	72	79	151	前期	2 (2.8)	1 (1.4)	4 (5.1)	3 (3.8)	6 (4.0)	4 (2.6)
				後期	2 (2.8)	0 (0.0)	5 (6.3)	2 (2.5)	7 (4.6)	2 (1.3)
4	66	90	156	前期	1 (1.5)	1 (1.5)	5 (5.6)	6 (6.7)	6 (3.8)	7 (4.5)
				後期	1 (1.5)	0 (0.0)	5 (5.6)	5 (5.6)	6 (3.8)	5 (3.2)
5	74	94	168	前期	2 (2.7)	1 (1.4)	8 (8.5)	4 (4.3)	10 (6.0)	5 (3.0)
				後期	2 (2.7)	1 (1.4)	8 (8.5)	3 (3.2)	10 (6.0)	4 (2.4)
6	71	87	158	前期	6 (8.5)	0 (0.0)	14(16.1)	2 (2.3)	20(12.7)	2 (1.3)
				後期	4 (5.6)	1 (1.4)	16(18.4)	0 (0.0)	20(12.7)	1 (0.6)

() 内は、学生数に対する免除者の割合を示す。

する大学の教育研究活動中に被った急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害」となっており、「教育研究活動中」とは、①正課を受けている間、②学校行事に参加している間、③①②以外で学校施設内にいる間、④学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間となっている。

昭和60年度からの事故件数及びその事故内容は表6、7のとおりである。なお、平成5年度における全国（加入者約250万人）の事故件数は8,956件で事故発生率は0.36%であった。

4) 福利厚生施設

イ. 食堂

昭和52年から、福利棟1階において、(財)学校福祉協会に経営を委託し、セルフサービス方式で運営されており、現在ホールの面積は453㎡、席数は390席で、8時15分から18時30分まで営業している。

昭和60年以降は、昭和61年にコーヒー自動販売機、平成4年に冷房装置が設置され、また、平成3年と平成6年に価格改訂があった。

利用者数も看護学科の新設に伴って年々増え、現在では1日平均1,600食を提供している。

表5 学生生活実態調査

調査年度	性別	医 学 部			薬 学 部			合 計		
		抽出数	回収数	回収率	抽出数	回収数	回収率	抽出数	回収数	回収率
昭 和 55年度	男	233	147	63.1%	95	59	62.1%	328	206	62.8%
	女	19	15	78.9	134	111	82.8	153	126	82.4
	計	252	162	64.3	229	170	74.2	481	332	69.0
58年度	男	279	161	57.7	127	95	74.8	406	256	63.1
	女	32	19	59.4	90	84	93.3	122	103	84.4
	計	311	180	57.9	217	179	82.5	528	359	68.0
61年度	男	269	137	50.9	111	60	54.1	380	197	51.8
	女	48	32	66.7	104	77	74	152	109	71.7
	計	317	169	53.3	215	137	63.7	532	306	57.5
平 成 元年度	男	250	94	37.6	96	44	45.8	346	138	39.9
	女	73	35	47.9	127	68	53.5	200	103	51.5
	計	323	129	39.9	223	112	50.2	546	241	44.1
4 年度	男	435	58	13.3	209	30	14.4	644	88	13.7
	女	181	43	23.8	241	45	18.7	422	88	20.9
	計	616	101	16.4	450	75	16.7	1066	176	16.5

表6 事故件数

年 度	学生数	正 課 中 (%)	学校行事中 (%)	課外活動中 (5%)	キャンパス 内の休憩中 (%)	合 計 (%)
昭和60	1221	12 (0.9)	1 (0.1)	21 (1.7)	1 (0.1)	35 (2.8)
61	1228	10 (0.8)		18 (1.4)		28 (2.2)
62	1237	8 (0.6)	3 (0.2)	11 (0.9)	1 (0.1)	23 (1.8)
63	1262			13 (1.0)	2 (0.2)	15 (1.2)
平成元	1250	4 (0.3)		12 (0.9)		16 (1.2)
2	1238	4 (0.3)		13 (1.1)	1 (0.1)	18 (1.5)
3	1231	1 (0.1)		14 (1.1)		15 (1.2)
4	1247	4 (0.3)		16 (1.3)		20 (1.6)
5	1269	2 (0.1)		4 (0.3)		6 (0.4)
6	1331	3 (0.2)		13 (1.0)		16 (1.2)

() 内は、学生数に対する被害者の割合を示す。

表7 事故内容

		昭和60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
運 動 中	靱帯損傷・捻挫	(3) 14	(2) 9	(4) 7	(1) 5	7	(2) 6	(1) 7	7	3	(2) 6	(15) 71
	骨折	6	(3) 7	(2) 5	(1) 3	4	(1) 7	5	(1) 4	2	5	(8) 48
	脱臼	(1) 2	1	1	(1) 3	1	1		1		2	(2) 12
	裂傷・挫創	(1) 1										(1) 1
	打撲	(1) 1										(1) 1
	眼の損傷			1		(1) 2						(1) 3
	歯の損傷			1				1				2
	腰痛	(1) 1										(1) 1
	アキレス腱断裂	2	2	(1) 2	(1) 2		2		1		1	(2) 12
	その他		(1) 1			1		1	3			(1) 6
計	(6) 26	(7) 21	(7) 17	(4) 13	(1) 15	(3) 16	(1) 14	(1) 16	5	(2) 14	(32) 157	
実 験 実 習 中	切傷・裂傷・創傷	5	3	1					(1) 2			(1) 11
	火傷	1	1				1		1		(1) 1	(1) 5
	薬疹									(1) 1		(1) 1
	眼の損傷		1	1				(1) 1				(1) 3
	捻挫		(1) 1					1	(1) 1		(1) 1	(3) 3
	その他	2	1	(1) 3		1						(1) 7
計	8	(1) 7	(2) 5		1	1	1	(2) 4	(1) 1	(2) 2	(8) 30	
そ の 他	靱帯損傷				1							1
	捻挫			(1) 1			1					(1) 2
	骨折	1			(1) 1							(1) 2
	計	1		(1) 1	(1) 2		1					(2) 5
合 計	(6) 35	(8) 28	(10) 23	(5) 15	(1) 16	(3) 18	(1) 15	(3) 20	(1) 6	(4) 16	(42) 192	

() 内は、女子学生で内数を示す。

ロ. 談話室、喫茶室

福利棟2階にある談話室（面積265㎡）には、約90席のソファ等が設置されており、テレビ、新聞、雑誌、囲碁・将棋等の設備を設け、学業の合間の休憩や親睦にくつろいだ場を提供している。

喫茶室は、談話室に隣接して設けられ、昭和55年から（財）学校福祉協会の委託経営により運営されており、8時15分から17時まで営業し、一日平均300名が利用している。

ハ. 売店、理容室

売店は、昭和52年から福利棟1階部分（面積130㎡）で書籍、文房具については中田図書販売(株)、日用雑貨については(株)大和富山店の委託経営により運営されており、8時30分から17時30分まで営業している。

理容室は、厚生棟1階において昭和55年から瀬川孝勝氏の委託経営により運営されており、9時から19時まで営業している。

5) 健康管理

学生諸君の健康管理に関しては、昭和58年に保健管理センターが設置され、昭和59年からは本格的な活動を開始し、その任に当たってきた。この保健管理センターの目的は、本学の学生（および教職員）の心身の健康保持・増進を図るためにセンターが附属病院と連携し、専門的業務を行うことにある。したがって、種々の疾患や悩みに対する指導・助言はもちろんのこと、健全な者の健康を維持または増進することも重要な目的としている。次に具体的な活動状況につき示す。

イ. 学校医による健康相談および処置

各種疾患の相談および健康の維持・増進のため、センター専任教官（内科）、看護婦および専門の校医（神経精神科、整形外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科）が相談に応じる体制をとっている。また簡単な処置についても対応しており、いずれも多数の学生（および教職員）に利用されている。学生のセンター利用者は、延べ件数にして昭和60年度の3,200件から平成6年度の4,400件と増加してきている。センター利用者の区分では、呼吸器疾

患（主にかぜ症候群）、消化器疾患が多く、それらに次いで創傷・熱傷、捻挫・打撲、筋肉・関節痛などが受信の理由となっている。また、アレルギーに関するアンケート調査を開始してからは、アレルギー性疾患についての受診・相談が増加していることが特徴として挙げられる。これら相談、処置に適切に対応できるように、設備の面でも年々充実させており、時代に則した対応を図っている。

ロ. 学生相談・心理相談

履修上の問題、将来の進路のこと、経済上の問題、その他さまざまな問題で悩むときには精神的にも不安定となり、種々の身体症状を伴うことも多い。主としてセンター教官、看護婦が相談を担当するほかに、学務相談には、医学部、薬学部より相談員を委嘱し協力いただいております。カウンセラーとして心理学の教官にも応援いただいている。また、自律訓練法の講習会も臨床心理師の協力を得て行っている。これらは数の上からは少数に留まるものの、重要な業務となっている。

ハ. 健康診断

全学生を対象に、定期健康診断を毎年4月、6月に実施している。実施項目は、内科、眼科、耳鼻科診察、血圧測定、尿検査、胸部X線撮影を行っている。健康診断実施時間に授業を入れないように配慮いただいております。受診率も良くなってきている。定期健診における有所見者に対して再検査、診察が行われ、必要な場合には附属病院に精査を依頼している。また、定期健康診断の他に、駅伝大会などの各種大会、山岳部夏山・冬山登山などのクラブ活動、スキー実習の際に臨時の健康診断を行っている。

ニ. 健康教育

定期に発行されている「学園だより」に、保健管理センターからのたよりとして毎回違ったテーマを取りあげ、わかりやすく解説している。また、全世界的に問題となっているエイズ（HIV感染）や実習に関連して関心の高い肝炎ウイルス、その他の感染症に関する講演会を、センター独自および学内共同で行ってい

る。更に、北陸地区の国立5大学合同で健康増進合宿セミナーを開催してきた。

これらの活動は、学生課（なかでも厚生係）のご協力を得て初めて成り立っている。また、各クラス担当教官、各講座主任教授のご協力、ご理解を得て行っている。今後も学生諸君がより良き学生生活、課外活動ができるように、心身の健康管理の面からの支援を続けていきたい。

6) 研 修

イ. 新入生合宿研修

富山は海と山の自然に恵まれ、本学は遠く富山湾を望み、近く北アルプス連峰を目前にした呉羽丘陵に立地している。創設以来本学では新入生合宿研修を実施し、早春の5月上旬、積雪の中を開通間もない立山天狗平で、学生・教職員が共に一泊し、悠大な自然の懐に入って己が人間の小ささを覚り、自然と人間・人間同士の出会いの場として語り合う機会としている。学生は全国から広く集まり、また地元出身者でも夏山はともかく、このころの厳しい春山の経験はなく、新入生には強烈な印象を与えるようで、卒業後も本学で学んだ良い思い出となっている。

往復の団体行動から宿泊中まで班別にリーダーを設け、学生に役目を分担させて自主協力活動を促し、晴天に恵まれれば屋外で雪中を国見峠や地獄谷へと歩き、スノーボードで斜面を滑り興じて十分に若さを発散し、雨天なら屋内で講演やスライド映写で山に関する知識を聞くなどと自由時間も交え、両学部、学生・教職員の別なく互いに交流し親しく話し合う意義は大きい。

(ただし昭和58年度は、乗鞍青年の家で実施した)

ロ. 在来生合宿研修

本学では、毎年12月に「合宿による共同生活と野外研修等を通じて、大学生活から生じる諸問題について教職員とのコミュニケーションを深めることにより、より健全な学生生活と豊かな人間形成に資する」ことを目的として在来生合宿研修を開催している。

平成6年度は、12月23日から27日までの4泊5日の日程で長野県山ノ内町の志賀高原発鳴温泉で本学学生約80名、本学教職員15名、特別講師1名が参加して行われ多大な成果をあげた。

第2節 課外活動

「正課」と「課外」は相互に深く影響し合っ
て学生のキャンパス生活を形成している。学生
は正課と課外の両者によって学問的にも、人間
的にも自立できるようになっていくと考えられ
る。学生は自ら選択した課外活動の中で、親密
な友人関係を見出し、社会人としての品性を
養って人間形成を図っていくことができる。大
学としても、正課と課外を有機的に結びつける
工夫と努力をしており、全学生に対して積極
的にサークルに参加するよう指導している。ま
た、活動の場となる施設の整備などに努めてい
る。

以下に、平成6年度に届け出のあった文化系
と体育系のサークルの現状と、それぞれのサー
クルの最近10年間の活動状況を中心に記し、併
せてスポーツ大会と医薬大祭について述べる。

平成6年度の課外活動サークル数および加入
学生数は次のとおりである。

サークル名	所属サークル数	加入学生数
体 育 系	28	934
文 化 系	17	466
合 計	45	1400

(注) 複数加入を含む。

1) 文化系サークル活動

各サークルとも、顧問教官がサークル活動全
般にわたって面倒をみている。学生自治会文化
部会として、機関誌「竹林に坐す」を年1回刊
行している。文化系サークルの活動の場として
は、北陸3県大学学生交歓芸術祭(芸交祭)が
ある。23の短大と大学が加盟しており、本学か
らは、軽音楽、管弦楽、三曲会、美術、写真の
各サークルが参加している。

① 青い鳥

昭和56年設立。顧問は小西 徹先生。加入学
生数30名。入院児童を楽しませるボランティア
活動から生まれたサークルである。小児科慰
問、日曜学校の子供たちとの交流を図ってい
る。七夕会(附属病院小児科)、日帰りキャン

プ(太閤山ランド)、打ち上げ合宿(浜黒崎
キャンプ場)などを行っている。

② 囲碁将棋部

昭和59年設立。顧問は小泉富美朝先生。加入
学生数14名。本学職員との対抗試合(第4回医
薬大名人戦)、春季北信越学生囲碁および将棋
大会(新潟大学、富山大学、金沢大学、本学)
に参加し、夏期(利賀村)と冬期(山田温泉)
の合宿によって技術の向上を図っている。

③ 演劇を楽しむ会

昭和54年設立。顧問は桜川信男先生。加入学
生数14名。新歓公演や大学祭公演を行ってい
る。

④ 管弦楽団

昭和52年室内合奏団設立。昭和61年管弦楽団
に編成替え。加入学生数35名。顧問は本田昂先
生。入学式での演奏、定期演奏会(第17回、県
教育文化会館ホール)、芸交祭(第41回、ラ
ポール小杉)、病院コンサート(附属病院)、合
宿(岐阜県上宝村)など活躍している。サークル
誌 L'ESTRO ARMONICO を刊行してい
る。

⑤ ギターマンドリンクラブ

昭和52年設立。顧問は桜川信男先生。加入学
生数29名。定期演奏会(第16回、ラポール小
杉)、北陸学生マンドリン合同演奏会(第22
回、富山市公会堂)、夏期合宿(志賀高原)を
行っている。

⑥ クラシックギター部

昭和53年設立。顧問は小泉富美朝先生。加入
学生数は21名。定期演奏会、北陸3県合同演奏
会、第24回プレクトラム音楽祭に参加してい
る。

⑦ 軽音楽部

昭和52年設立。顧問は諸橋正昭先生。加入学
生数35名。定期演奏会(第12回)、新歓コン
サート、鯉のぼりコンサートに参加。合宿(北
志賀)によって技を磨いている。

⑧ 混声合唱団

昭和52年設立。顧問は伊藤祐輔先生。加入学生数36名。定期演奏会、他大学との合同演奏会を行っている。サークル誌“唱”を刊行している。

⑨ 茶道部

昭和57年設立。顧問は木村正康先生。部員数26名。勉強会、練習、大学祭での発表会などで活躍している。

⑩ 三曲会

昭和58年設立。顧問は小林正先生。会員数30名。日本古来の楽器である琴、尺八、三絃を演奏するサークル。芸交祭、ゆかた会、病院コンサート（協立病院）に参加。

⑪ 写真部

昭和51年設立。顧問は辻陽雄先生。部員数12名。写真展（年2回）や撮影会を開催している。

⑫ 富山リーガル・クラブ

昭和63年設立。顧問は阿原稔先生。部員数9名。法律学を勉強するサークルで、医事法制や法医学のみならず、一般の法令を研究する。

⑬ 楮鞭会

昭和49年設立。顧問は難波恒雄先生。会員数126名。永い歴史を持つサークル。植物採集（5月、6月、7月）、植物栽培、文献輪読、夏合宿を行っている。20周年記念式典パーティを実施。会誌“楮鞭”を刊行している。

⑭ 書道部

昭和59年設立。顧問は鏡森定信先生。部員数4名。看板書き（12月）、卒業生に送る色紙書き（3月）などを行っている。

⑮ 美術部

昭和51年設立。顧問は大谷修先生。部員数18名。作品の制作および鑑賞を行う。交歓芸術祭や院内展を開催している。

⑯ ウインドアンサンブル

平成2年設立。顧問は佐藤根敏彦先生。部員数15名。管弦楽団と異なり、楽器構成はほとんど管楽器である。附属病院ロビーで病院コンサート（3月）を開催して患者の皆さんに好評を得ている。

⑰ アマチュア無線クラブ

平成元年設立。顧問は北川泰司先生。クラブ員数12名。アマチュア無線の健全な発展、会員相互の友好の増進、無線科学の向上を目的としている。JARL 総会に参加、各種コンクールに出場。ALLJA コンテストでは北陸地区1位であった。

2) 体育系サークル活動

各サークルとも顧問教官がサークル活動の活性化に努めている。学生自治会体育会では、機関誌「天放」を毎年1回刊行している。体育系サークルが参加する主な大会は、北陸地区国立大学総合体育大会（北国大会）、西日本医科学学生総合体育大会（西医体）および関西薬学生競技大会（関薬）である。北国大会は、北陸地区の国立大学（金沢大、富山大、福井大、福井医科大、高岡短期大、富山医薬大）相互の友好をクラブ活動を通して深めることを目的としている。西医体は関西東ブロックに属する44の医学部・医科大の体育系のサークルが一堂に会して、日頃鍛えた技を20競技で競い合う大会である。参加総人数は1万5,000人に達する。本学はこの大会で総合準優勝（45回大会）、4位（42回大会）、6位（43回大会）の成績を挙げている。関薬は関西の薬学生だけの大会で、8競技が行われている。以下に各サークルのこの10年間の活動状況と平成6年度の現況を記す。

① 空手道部

昭和52年設立。顧問は佐々木博先生。部員数22名。過去に輝かしい戦績を残している。北国大会：団体優勝（40回大会）、西医体：ベスト8（41回、42回、43回大会）

② 弓道部

昭和51年設立。顧問は武田龍司先生。部員数53名。北国大会：団体女子準優勝（42回、46回大会）、3位（40回大会）、西医体：団体男子優勝（45回大会）、3位（46回大会）、団体女子3位（44回大会）、6位（38回、43回大会）。

③ 剣道部

昭和51年設立。顧問は二谷立介先生。部員数33名。北国大会：男子団体準優勝（43回大会）、3位（40回、44回）、女子団体3位（38回～41回大会、43回大会）。西医体：女子団体準

優勝（41回大会）、男子団体準優勝（37回大会）、女子個人優勝（38回大会）。

④ ソフトテニス

昭和51年設立。顧問は平賀紘一先生。部員数51名。北国大会：男子団体準優勝（44回大会）、女子団体準優勝（42回大会）、男子個人戦優勝（45回大会）、西医体：女子団体優勝（45回大会）、準優勝（44回大会）、女子個人優勝（46回大会）。関業：男子団体準優勝（平成4年度）、個人優勝（平成5年度）。

⑤ 硬式庭球部

昭和51年設立。顧問は滝沢久夫先生。部員数43名。北国大会：男子団体準優勝（37回大会）、女子団体準優勝（41回大会）、西医体に参加。

⑥ サッカー部

昭和51年設立。顧問は落合宏先生。部員数35名。北国大会：優勝（44回大会）、準優勝（41回、45回大会）、西医体に参加。

⑦ 水泳部

昭和51年設立。顧問は小野武年先生。部員数36名。北国大会：男女とも個人種目別で数多く優勝。西医体：男子総合優勝（43回大会）、準優勝（44回、45回大会）、その他個人種目別で優勝（41回、42回大会）。

⑧ 競技スキー部

昭和51年設立。顧問は藤巻雅夫先生。部員数45名。西医体：男子総合準優勝（40回、42回、43回、45回、46回）、女子総合準優勝（38回、40回、43回、44回大会）、女子総合優勝（45回、46回大会）。

⑨ 山岳部

昭和51年設立。顧問は小野寺孝一先生。部員数22名。春、新歓合宿（立山）、夏、夏山縦走、秋、もみじ狩り、冬、冬山登山。夏期の双六小屋診療所開設をサポート、昭和59年部員が国体へ出場。

⑩ 準硬式野球部

昭和51年設立。顧問は川崎匡先生。部員数40名。北国大会：優勝（38回、39回、42回大会）、西医体：3回戦進出（39回大会）、ベスト16（45回大会）、関業：3位（平成4年、6年

の大会）。

⑪ 柔道部

昭和53年設立。顧問は三崎拓郎先生。部員数26名。北国大会：団体準優勝（42回大会）、3位（37回大会）、西医体：団体準優勝（38回大会）、ベスト8（41回大会）、決勝トーナメント進出（39回大会）。

⑫ 体操・新体操部

昭和51年設立。昭和60年に新体操が加わった。顧問は小泉富美朝先生。部員数20名。北国大会：男子団体準優勝（38回、39回、44回大会）、西医体に参加。

⑬ 卓球部

昭和51年設立。顧問は清水岑夫先生。部員数45名。北国大会：女子団体3位（40回、46回大会）、男子シングルス準優勝（46回大会）、西医体：男子団体準優勝（44回大会）、4位（43回、46回大会）、女子団体決勝トーナメント進出（39回、40回大会）、関業：男子団体準優勝（昭和63年、平成3年、5年）、女子団体準優勝（昭和63年、平成2年）、男子シングルス優勝（平成2年）。

⑭ 男子バスケットボール部

昭和51年設立、顧問は諸橋先生、部員数33名。北国大会：3位（37回～42回、46回大会）、西医体：決勝トーナメント進出（38回～41回大会）、関業：3位（昭和61年）。

⑮ 女子バスケットボール部

昭和51年設立。顧問は諸橋正昭先生。部員数21名。北国大会：準優勝（46回大会）、3位（37回～44回大会）、西医体：優勝（41回、43回、46回大会）、3位（45回大会）、関業：3位（昭和62年）。

⑯ バドミントン部

昭和51年設立。顧問は倉知正佳先生、部員数72名。北国大会：女子団体準優勝（43回、44回大会）、3位（42回大会）、男子団体3位（42回大会）、西医体：男子団体優勝（42回大会）、準優勝（43回大会）、ベスト16（41回大会）、女子団体ベスト16（45回大会）、全業大会：男子団体優勝（平成3年）、女子団体優勝（平成3年）、準優勝（平成2年）。

⑰ 男子バレーボール部

昭和51年設立。顧問は白木公康先生。部員数34名。北国大会：3位（37回～40回、42回～44回大会）、西医体：決勝トーナメント進出（37回、38回、40回大会）、全薬大会：3位（昭和63年）。

⑱ 女子バレーボール部

昭和52年設立。顧問は井上博先生。部員数26名。北国大会：3位（41回、44回、45回大会）、西医体：4位（44回～46回大会）、関薬：6位（平成6年）。

⑲ ハンドボール部

昭和51年設立。顧問は滝沢久夫先生。部員数31名。西医体：3位（37回大会）、北国大会に参加。

⑳ ヨット部

昭和53年設立。顧問は大島博先生。部員数27名。北国大会：総合準優勝（41回、46回大会）、3位（39回、40回、42回大会）、西医体：総合13位（46回大会）、19位（37回、40回、41回大会）。平成5年葛西部員が国体出場。

㉑ ラグビーフットボール部

昭和51年設立。顧問は高久晃先生。部員数25名。北国大会：準優勝（41回大会）、3位（39回、40回、42回大会）、西医体：ベスト16（41回大会）。

㉒ 陸上競技部

昭和51年設立。顧問は藤巻雅夫先生。部員数35名。北国大会：男子総合3位（41回、42回大会）、女子総合3位（41回～44回大会）、個人種目優勝（43回、45回大会）、西医体：男子総合準優勝（38回、40回、42回大会）、3位（43回大会）、4位（41回大会）、8位（37回大会）、女子総合準優勝（43回大会）、関薬：男子総合優勝（平成3年、5年）、3位（昭和62年～平成2年、平成4年）。

㉓ 合気道部（富山医科薬科大学養神館合気道部）

昭和60年設立。顧問は高屋憲一先生。部員数32名。西医体：オープン参加（41回大会）、団体の部取闘賞（43回大会）、個人の部優秀賞（43

回大会）。

㉔ ウインドサーフィン部

昭和61年設立。顧問は古田勲先生。部員数22名。週2回練習、学連レースや一般レース参加に向けて頑張っている。

㉕ 応援団

昭和63年設立。顧問は古田勲先生。部員数8名。入学式、卒業式、大学祭、運動会において演武会を行っており、高い評価を受けている。

㉖ 女子軟式野球部

昭和60年設立。顧問は武田龍司先生。部員数32名。第2回および第3回全国大学女子軟式野球大会で準優勝（昭和63年および平成元年）。春季・秋季北陸大会にも参加。

㉗ 軟式野球同好会

平成2年設立。顧問は大谷修先生。部員数15名。地元の野球チームと試合をし、野球技術の向上を図っている。

㉘ スキー・スノーボード > チームウェイフク

平成6年設立。顧問は大谷修先生。部員数50名。冬期スキー、スノーボード訓練、春期合宿。

3) サークルリーダー研修会

サークル活動は学生の自主性に委ねられており、そのため、サークルの組織と運営において民主的なルールが確立していない。また、各サークルにおいては、部員相互の人間関係は緊密であり、組織に対する帰属感も強いが、反面セクト化傾向も強い。このような点を補うためには、サークル各リーダーにリーダーとしての資質の向上とリーダーシップの向上が望まれる。学生課が世話役となって毎年8月に文化系と体育系の各サークルのリーダーを集めて、このための研修を行っている。学内外の講師による講演会と体育系と文化系それぞれで個別討論会をもっている。

4) 春季・秋季スポーツ大会及び大運動会

いずれも体育会事業局が企画・運営している。全学生と職員の自由参加によるお祭りのものである。春季・秋季スポーツ大会は医学部医学科と薬学部薬科学科の各学年aチームとb

チーム及びサークルごとのチームによって競われる。競技種目は、ソフトボール、バレーボール、テニス、卓球、バスケットボール、リレー、綱引きなど多岐にわたっている。大運動会は、学生と職員が参加する運動会である。職員の部では、外科2が強力チームであるが、近年、薬剤部、眼科・耳鼻科、整形・リハビリチームなども外科2チームを脅かしている。

5) 医薬大祭

毎年10月末の金・土・日の3日間行っており、平成6年度で18回を数える。日常性からの解放を謳っている。その内容は、医薬展、スポーツ大会、応援団演武、軽音ライブ、医薬大名人戦（囲碁、将棋）、大学祭記念学術講演会、医薬大オープン（硬式テニス）、ディスコパーティ、後夜祭（ファイアーストーム）などである。また、各サークルが屋外出店（模擬店）している。学術講演会は医学部・附属病院助講会主催で、最近3年間の講演者と演題をあげると、日野原重明先生「日本の医療の軌道修正の提唱」、石川信義先生「自由こそ治療だ！一患者をつくる医療からの脱却」、杉田秀夫先生「分子生物学と神経学」である。

第3節 卒業生の動向

1) 医学部

昭和57年3月に第1回生75名が卒業して以来、平成7年3月卒業の第14回生まで、計1,348名（うち女子230名）が卒業した。

第1回生を始め卒業生は、いまや医学部および附属病院における研究・診療の中堅となっており、本学（母校）の発展に寄与している。

卒業生の進路状況及び本学への残留率を図にしてみた。

進路状況は、研修医82%、大学院進学9%、助手3%、他6%となっている。

昭和60年度から平成6年度までの卒業生のうち、大学院進学を含めて、本学での研修を行うため残る学生は、40~50%と低迷し、本学医学部及び附属病院の将来の発展を考えると残念なことである。これは他の新設医科大学も同様でこの事が問題となっている。なお、本学出身者で他大学、あるいは他県の病院へ行くものは、ほとんどが郷里に戻る、いわゆるUターンである。

このため、医学部では卒業生の母校への定着率を高めるため、卒後教育検討委員会を設け、6年生を対象とした卒後教育ガイダンスを年2回行うとともに、アンケート調査を実施し、その結果をもとに鋭意検討を重ねている。

また、附属病院では卒後臨床研修、とりわけその最も基本となる初期研修の効果が高められるよう、平成6年度から臨床研修委員会が中心となり卒後研修プログラム（「卒後研修の手引き（平成6年度）」）を作成し、卒業生により魅力ある修練の場を提供するとともに、時代に即した医師養成を目指している。

本学は、平成5年度には新設医科大学としては最初に医学部に四年制看護学科が創設され、医療に関しては医師の良きパートナーである指導的な看護婦（士）の養成をも目指した医療に関する総合的な教育の場となった。

4年間に看護の学問的知識・技術・態度を身につけ、卒業後は看護婦（士）、あるいは保健

婦（士）・養護教諭として専門的立場で活躍することが期待されている。また、設置を計画している大学院修士課程に進学して臨床看護学などの研究に携わるとともに、大学での教員になる道もある。

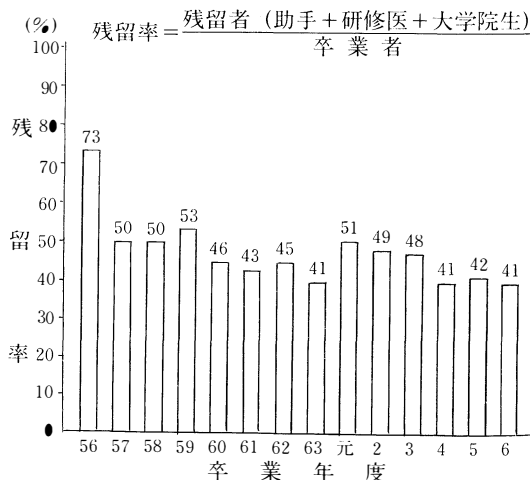
平成9年3月には第一期の卒業生を送り出すことになり、現在看護学科教官により、適切な進路指導が行われている。

2) 薬学部

ア. 本学部の歴史は、地元の伝統産業（富山のくすり）の振興のために明治26年に設立された共立富山薬学校に始まり、市立富山薬学校（明治30年）、県立薬学専門学校（明治43年）、官立富山薬学専門学校（大正9年）、富山大学薬学部（昭和24年）へと、組織・学制の改革に伴って名称の変更を重ね、昭和50年には和漢薬研究所とともに富山医科薬科大学の創設に参加し、昭和51年に第1期生を迎えて今日に至っている。

その間、第1回卒（大正2年）から第82回卒（平成7年）までの卒業生は約7,100名に達し、全国各地はもとより海外までに及ぶ活躍ぶりは伝統的に高い評価を受けている。

富山医科薬科大学の卒業生としては、昭和55年3月卒業の第1回生から平成7年3月卒業の医学部卒業生の本学への残留率



医学部卒業者の進路状況

区分	出身別	年度														計	
		昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6		
本学	助手	県内出身	5	6	2	2	3	1	2	0	0	0	0	1	0	0	22
		県外出身	1	4	4	7	0	0	3	1	0	1	1	1	0	0	23
		計	6	10	6	9	3	1	5	1	0	1	1	2	0	0	45
	研修医	県内出身	7	14	14	3	10	14	7	21	27	18	21	28	17	12	213
		県外出身	24	17	15	33	24	21	21	20	15	26	16	13	25	20	290
		計	31	31	29	36	34	35	28	41	42	44	37	41	42	32	503
	大学院	県内出身	9	3	4	6	3	3	0	2	4	3	3	0	1	1	42
		県外出身	9	7	7	3	6	1	2	2	4	1	1	3	2	4	52
		計	18	10	11	9	9	4	2	4	8	4	4	3	3	5	94
	研究生	県内出身	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		県外出身	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6
		計	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7
計	県内出身	21	24	20	11	16	18	9	23	31	21	24	29	18	13	278	
	県外出身	34	32	26	43	30	22	26	23	19	28	18	17	27	26	371	
	計	55	56	46	54	46	40	35	46	50	49	42	46	45	39	649	
他大	研修医	県内出身	1	5	0	1	0	2	0	3	5	5	5	1	3	2	33
		出身県の大学	5	20	22	23	24	28	35	30	21	21	17	34	26	24	330
		その他	6	10	9	11	15	9	0	13	11	5	7	13	13	12	134
		計	12	35	31	35	39	39	35	46	37	31	29	48	42	38	497
	大学院	県内出身	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	4
		出身県の大学	2	1	0	1	7	0	0	0	1	0	0	1	0	0	13
		その他	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	2	0	8
		計	2	2	1	2	8	1	0	1	4	0	1	1	2	0	25
	研修生	県内出身	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
		出身県の大学	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		その他	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		計	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5
計	県内出身	1	5	0	2	1	2	0	3	7	5	6	2	3	2	39	
	出身県の大学	7	21	24	24	31	28	35	30	22	21	17	35	26	24	345	
	その他	7	11	10	11	16	10	0	14	12	5	7	13	15	12	143	
	計	15	37	34	37	48	40	35	47	41	31	30	50	44	38	527	
県内の病院	県内出身	0	1	2	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	0	8	
	県外出身	1	0	2	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	9	
	計	1	1	4	1	2	0	1	1	0	3	2	1	0	0	17	
県外の病院	県内出身	1	1	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	2	1	10	
	出身県の病院	2	5	5	1	1	7	2	4	4	1	3	4	4	3	46	
	その他	1	0	2	4	2	3	3	2	3	3	1	1	4	2	31	
	計	4	6	8	6	4	12	5	6	7	4	4	5	10	6	87	
厚生省	県内出身	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	
	県外出身	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	計	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	
その他	県内出身	0	0	0	1	0	0	0	3	0	1	3	1	1	1	11	
	県外出身	0	1	0	2	0	1	1	10	1	10	6	9	7	6	54	
	計	0	1	0	3	0	1	1	13	1	11	9	10	8	7	65	
合計	県内出身	23	31	23	16	19	22	9	29	38	30	34	33	24	17	348	
	県外出身	52	71	69	86	81	71	68	84	61	69	53	79	83	73	1000	
	計	75	102	92	102	100	93	77	113	99	99	87	112	107	90	1348	

○進路

区 分	卒業年度	就 職						計	大学院進学	研修生・研究生	そ の 他	合 計	
		病 院	製 薬 会 社 <small>(化学工業含む)</small>	そ の 他 製 造	卸 ・ 小 売	公 務 員	そ の 他						
薬 学 部	昭和54～ 59年度	(62) 74	(138) 178	(3) 3	(23) 29	(19) 37	(19) 21	(264) 342	(35) 165	(14) 31	(9) 12	(322) 550	
	昭和60年度	(12) 12	(24) 33	(1) 2	(1) 1	3	(2) 3	(40) 54	(2) 31	(1) 5	(4) 4	(47) 94	
	昭和61年度	(4) 5	(14) 24	(2) 2	(3) 5	(6) 10	(2) 2	(31) 48	(6) 31	(3) 3	(6) 9	(46) 91	
	昭和62年度	(11) 14	(23) 40	2	(1) 2	(6) 7	(1) 1	(42) 66	(3) 28	(1) 1	1	(46) 96	
	昭和63年度	(13) 17	(21) 26	(2) 2	(5) 5	(2) 3	(3) 3	(46) 56	(3) 3	(2)		(51) 89	
	平成元年度	(13) 15	(31) 38	(3) 5	(1) 3	(4) 7	(2) 4	(54) 72	(2) 26	8	1	(56) 107	
	平成2年度	(12) 12	(26) 35		1	(10) 11	(3) 4	(51) 63	(3) 24	(1) 2	4	(55) 93	
	平成3年度	(13) 13	(23) 29		(3) 6	(5) 6	(2) 2	(46) 56	(9) 33	(1) 1	2	(56) 92	
	平成4年度	(29) 33	(18) 24	1	(4) 6	(5) 7	(2) 2	(58) 73	(5) 29	3	1	(63) 106	
	平成5年度	(18) 22	(15) 21		(6) 11	(4) 7		(43) 61	(8) 26	(3) 5	(1) 3	(55) 95	
	平成6年度	(21) 25	(5) 11		(5) 7	(3) 6		(34) 49	(15) 38	(2) 4	2	(51) 93	
	計	(208) 242	(338) 459	(11) 17	(52) 76	(64) 104	(36) 42	(709) 940	(91) 462	(28) 65	(20) 39	(848) 1,506	
大 学 院 薬 学 研 究 科	前期課程	昭和54～ 59年度	(6) 13	(12) 93	(1) 6	1	(9) 17	(2) 4	(30) 134	(3) 25	(3) 4	(2) 2	(38) 165
		昭和60年度		(3) 19	3		(1) 3		(4) 25	7	(1) 1	(5) 33	
		昭和61年度	1	17		1	(1) 1	(1) 1	(2) 21	7	1	(2) 29	
		昭和62年度		21	(1) 2		1	1	(1) 25	(2) 11	(1) 1	(4) 37	
		昭和63年度		(4) 22		(1) 1	2	1	(5) 26	(2) 6	(1) 4	(8) 36	
		平成元年度		(1) 18	4		1	1	(1) 24	(2) 3	(1) 1	(4) 28	
		平成2年度	1	(3) 26					(3) 27	(1) 6	1	(1) 2	(5) 36
		平成3年度		(1) 21			(1) 3		(2) 24	(2) 3			(4) 27
		平成4年度		(2) 18	3		(1) 1	1	(3) 23	7			(3) 30
		平成5年度	(2) 3	(6) 26			(1) 1	(1) 1	(10) 31	(3) 6	(1) 2		(14) 39
		平成6年度	(1) 4	(4) 21			(1) 3		(6) 28	3			(6) 31
		計	(9) 22	(36) 302	(2) 18	(1) 3	(15) 33	(4) 10	(67) 388	(15) 84	(5) 8	(6) 11	(93) 491
	後期課程	昭和55～ 59年度		2				(1) 7	(1) 9	1	1	(1) 11	
		昭和60年度		1			1	2	4		(1) 2	(1) 6	
昭和61年度			1				2	3	1		4		
昭和62年度			2			1	4	7	2	1	10		
昭和63年度			1				(4) 5	(4) 6	1	1	(4) 8		
平成元年度			1			1	1	3			3		
平成2年度			3				(2) 3	(2) 6		(1) 5	(3) 11		
平成3年度			2				4	6			6		
平成4年度			1				(3) 3	(3) 4			(3) 4		
平成5年度			(1) 3			1	5	(1) 9			(1) 9		
平成6年度		1			(1) 1	(2) 5	(3) 7			(3) 7			
計		(1) 18			(1) 5	(12) 41	(14) 64	5	(2) 10	(16) 79			

○就職地

区分	卒業年度	富山県内	北陸 (富山を除く)	その他中部	北海道	東北	関東	関西	中国	四国	九州	外国	合計	
薬学部	昭和54～59年度	(137) 157	(19) 26	(34) 46	(1) 1	(4) 9	(34) 52	(27) 43	(4) 4	(4) 4			(264) 342	
	昭和60年度	(19) 20	(4) 4	(6) 8		1		(7) 15	(4) 6				(40) 54	
	昭和61年度	(14) 18	(2) 2	(5) 6	(1) 2	(2) 3	(5) 10	(1) 5	(1) 1		1		(31) 48	
	昭和62年度	(22) 29	(5) 5	(5) 6		(1) 1	(4) 15	(4) 8		(1) 1		1	(42) 66	
	昭和63年度	(18) 21	(5) 6	(5) 5	(1) 1		(13) 16	(3) 4			(1) 1		(46) 56	
	平成元年度	(23) 24	(6) 7	(9) 12		(1) 1	(9) 18	(4) 8	(1) 1		(1) 1		(54) 72	
	平成2年度	(16) 16	(6) 7	(9) 12			(12) 16	(5) 9		(1) 1	(2) 2		(51) 63	
	平成3年度	(9) 12	(7) 7	(6) 7		(1) 2	(16) 20	(7) 8					(46) 56	
	平成4年度	(14) 18	(8) 8	(10) 13	(1) 1	(1) 1	(9) 11	(9) 12	(1) 3	(2) 3	(3) 3		(58) 73	
	平成5年度	(20) 24	(5) 5	(11) 11	1	1	(2) 10	(2) 4		(1) 1	(2) 3		(43) 61	
	平成6年度	(9) 13	(9) 10	(4) 8	(1) 1	(2) 3	(5) 7	(5) 3		(1) 1	(3) 3		(34) 49	
	計	(301) 352	(76) 87	(104) 134	(5) 8	(12) 22	(116) 190	(66) 110	(7) 11	(10) 12	(12) 13	1	(709) 940	
大学院薬学 研究科	前期課程	昭和54～59年度	(17) 41	(1) 5	(3) 10	1	1	(7) 43	(1) 31		(1) 2		(30) 134	
		昭和60年度	(2) 7	1				(1) 11	(1) 3		3		(4) 25	
		昭和61年度	(1) 6	1	2			(1) 10	1		1		(2) 21	
		昭和62年度	6		1		1	(1) 13	3		1		(1) 25	
		昭和63年度	(1) 5	1	1	1		(2) 8	(2) 8		1	1	(5) 26	
		平成元年度	(1) 4					17	3				(1) 24	
		平成2年度	(1) 3	1				(2) 16	7				(3) 27	
		平成3年度	(1) 3					(1) 13	7			1	(2) 24	
		平成4年度	3		(2) 3			(1) 11	6				(3) 23	
		平成5年度	(4) 6		(1) 3			(4) 13	8				(1) 31	
	平成6年度	(1) 7	(1) 2	(2) 6	1	1	(1) 5	(1) 6				(6) 28		
	計	(29) 91	(2) 11	(8) 26	3	3	(21) 160	(5) 83		(1) 8	2	(1) 1	(67) 388	
	後期課程	昭和55～59年度	(1) 3					1				5		(1) 9
		昭和60年度	1						1				2	4
		昭和61年度						1					2	3
		昭和62年度	1					1	1				4	7
		昭和63年度						1					(4) 5	(4) 6
		平成元年度	1					1					1	3
		平成2年度	(1) 2		1			2					(1) 1	(2) 6
		平成3年度	1					1	1				3	6
平成4年度		(3) 3						1					(3) 4	
平成5年度		(1) 3						1	1				(1) 9	
平成6年度	(1) 1		1								(2) 5	(3) 7		
計	(7) 16		2			9	5			5	(7) 27	(14) 64		

第16回生まで1,506名に達し、そのうち女子は848名を数える。

薬学部卒業生の進路状況は、昭和60年度から平成6年度までの進路先の変化をみると、大学院進学者が33%から41%と増え、特に女子が4%から29%に大きく増えている。

これは、大手製薬メーカーの研究職には大卒ではなかなか就職できないためではなかろうか。

また、就職先をみると昭和60年度は製薬会社61%（就職者中の割合）、病院22%、公務員6%、卸・小売2%であったものが、平成6年度では病院51%、製薬会社22%、卸・小売14%、公務員13%となっている。

男女別にみると、男子は昭和60年度は製薬会社64%、公務員21%であったものが、平成6年度では製薬会社40%、病院27%、公務員20%、卸・小売13%となっており、女子は昭和60年度は製薬会社60%、病院30%であったものが、平成6年度では病院62%、製薬会社15%、卸・小売15%、公務員9%となっている。

男女ともに製薬会社が減り、病院、卸・小売が圧倒的に増えている。このため、薬剤師国家試験の意味が重要視されることとなる。

なお、病院の薬剤師希望者のほとんどが地元志望であるが、目的が達成できずに、地元の大学病院の薬剤部研修生になる者も数人いる。

求人の方は、円高による景気の低迷が続いているが、この業界は景気には影響されないと一般的に言われ、また医薬分業が進み、薬局からの求人件数は急増している。

イ. 大学院

大学院前期（修士）課程は昭和55年3月修了から平成7年3月まで合わせて491名（うち女93名）が修了し、そのうち留学生は32名いる。

薬学研究科の進路状況は、平成4年度までは製薬会社の研究職約60%、大学院進学約15%、公務員約10%で病院に進む者はほとんどいなかったが、平成5年度以降は病院に進む者が10%近くになってきている。

大学院後期課程は昭和56年3月修了から平成7年3月まで合わせて79名（女16名）が修了

し、うち留学生が半数を超える41名が修了している。

留学生の中には、学位取得後母国の大学助教や研究所の研究者として活躍しているものも多く、また日本国内の製薬会社の研究所にも数名就職している。

薬学部卒業生及び大学院薬学研究科修了生の進路状況は別表のとおりである。

第4節 市民医薬学講座及び医薬大祭記念学術講演会

昭和51年に第1回医薬大祭が行われたが、回を重ねて第7回（昭和57年）から医薬大祭の一環として「市民医薬学講座」が始まった。この講座は、「学内外の教授等2～3人によるわかりやすい市民向けの講演会」として毎回市民か

ら好評を博している。また、学外の著名な方々を招いて開催される「医薬大祭記念学術講演会」も年々充実してきている。以下に「市民医薬学講座」及び「学術講演会」の内容を紹介する。

「市民医薬学講座」

第1回	荻田善一	和漢薬研究所教授	性決定機構について
	辻 陽雄	医学部教授	姿勢と腰痛—その正しい理解と明日への活躍のために—
第2回	熊谷 朗	病院長	肥満と健康
	佐々 学	学長	人間の健康と生存のための環境保全
第3回	佐々木博	医学部教授	肝臓病
	篠山重威	医学部教授	心臓発作
	木村正康	薬学部教授	糖尿病治療薬
	荻田善一	和漢薬研究所教授	老化は防げるか
	矢野三郎	医学部教授	糖尿病とその治療
第4回	山本恵一	医学部教授	肺がん診察の第一線からの報告
	出来田満恵	副看護部長	ターミナル・ケア—臨死者の看とり—
	片山 喬	医学部教授	腎移植をめぐる
第5回	高久 晃	医学部教授	脳死
	片山 喬	医学部教授	腎移植
	佐々木博	医学部教授	肝臓病
	矢野三郎	医学部教授	アレルギー
	難波恒雄	和漢薬研究所教授	薬食同源
	寺澤捷年	附属病院助教授	痛み・シビレの漢方治療
第6回	佐々 学	学長	未来への医学—医学者へのきっかけと経験を通して—
	北川正信	医学部教授	タバコの害—タバコはこんなにも身体をむしばむ—
	難波恒雄	和漢薬研究所教授	和漢薬について
	倉知正佳	医学部教授	精神の健康と病気
	寺澤捷年	附属病院助教授	和漢診療こぼれ話—医療と医学の狭間で—
	辻 陽雄	医学部教授	腰痛
第7回	矢野三郎	医学部教授	気管支喘息とアレルギー
	難波恒雄	和漢薬研究所教授	和漢薬の故郷を訪ねて
	寺西秀豊	医学部助教授	花粉症について
	上山武史	医学部助教授	動脈硬化性疾患の外科的治療
	山崎高應	学長	私の信条と科学
	寺澤捷年	附属病院助教授	病気でない病気—不定愁訴症候群の和漢薬治療—
第8回	加須屋實	医学部教授	環境汚染・破壊と健康問題
	井上恭一	医学部助教授	肝臓病から身を守る方法

	加藤弘巳	医学部助教授	高齢者の健康と骨粗しょう症
	寺澤捷年	附属病院助教授	虚弱体質の和漢薬治療
第9回	鏡森定信	医学部教授	過労死について何が問われているか
	辻 陽雄	医学部教授	腰痛と仲良く付き合う法
	難波恒雄	和漢薬研究所教授	和漢薬と山野草
	斎藤清二	附属病院講師	ターミナルケアー 一生と死を考えるー
第10回	寺澤捷年	附属病院教授	若さを保つ漢方
	白木公康	医学部教授	賢い母とワクチン接種
第11回	辻 陽雄	医学部教授	幸せを自ら作り出すコツ ー痛みなく、自由に活動できる日々のためにー
	鏡森定信	医学部教授	高齢化社会に於ける医療
第12回	小林 正	医学部教授	糖尿病はなぜ恐ろしいか
	高久 晃	医学部教授	脳卒中について
第13回	松井寿夫	医学部助教授	骨粗鬆症はなぜ恐ろしいか
	濱崎智仁	附属病院講師	魚と健康

注) 職名及び所属は、講演を担当された時のものです。

「学術講演会」

昭和60年度	三木 哲郎	(大阪大学医学部助手)	『生命工学の医学薬学におよぼすインパクト』 DNA塩基配列の多型性(RFIPS)を利用した遺伝病の解析
昭和61年度	黒木登志夫	(東京大学医科学研究所癌細胞学研究部教授)	『癌細胞誕生…社会から遺伝子まで…』
昭和62年度	松原 謙一	(大阪大学細胞工学センター長・遺伝子構造機能調節部門教授)	「遺伝子工学と医学」ー分子生物学の医学への応用ー
昭和63年度	岡本 宏	(東北大学医学部医化学第一講座教授)	『逆境から甦る細胞』
平成元年度	丸山 直滋	(新潟大学脳研究所教授)	「認識のしくみ」ー視覚・聴覚中枢機序よりの考察ー
平成2年度	清水 将之	(名古屋市立大学医学部精神科助教授)	青年の自立と大学生の精神病理
平成3年度	中川 米造	(大阪大学名誉教授)	医師・患者関係の人間科学
平成4年度	日野原重明	(聖路加看護大学学長)	「日本の医療の軌道修正の提唱」
平成5年度	石川 信義	(三枚橋病院理事長兼院長)	自由こそ治療だ!
平成6年度	杉田 秀夫	(国立精神・神経センター総長)	分子生物と神経学